

## かきねの戸

昔むかし、あるところに、にいさんと妹がいました。

ある日のこと、おかあさんがよそへ出かけることになりました。おかあさんは、子どもたちにいいました。

「おまえたち、おかあさんはこれから出かけるけど、しっかりおるすばんしていてね。かきねの戸にはくれぐれも気をつけるのよ」

おかあさんは、どろぼうが入つてこないように、かきねの戸に気をつけなさいといつたのです。

おかあさんが出かけてしばらくすると、子どもたちはたいいくつになつてきました。そこで、にいさんが、

「ねえ、森へ行つて少し遊んでこようよ。かきねの戸は持つていけばいいだろ」といいました。妹はよろこんで、さつそくふたりでかきねの戸をはずすと、それをだいじに持つて、森へ出かけていきました。

子どもたちは、森の中をかけまわつて遊んでいるうちに、道によつてしましました。あたりはだんだん暗くなり、今夜はもううちに帰れそうにありません。ふたりは、おそろしいけものに食べられるのではないかと、こわくなつてきました。そこで、大きなかしの木に登つて朝になるのを待つことにしました。子どもたちは、かきねの戸をだいじに持つて、木に登つていきました。

ふたりが木の上でじつとしていると、まもなく、どろぼうたちが大きなふくろを引きずつてやつて来ました。そして、かしの木の下まで来ると、ふくろをあけて、ぎつしりつまつたお金を数えはじめました。

ふたりは、どろぼうに気づかれないように、木の上でじつとしていました。しばらくすると、にいさんが妹にささやきました。

「おしつこがしたい。もうがまんできないよ」「おしつこがしたい。もうがまんできないよ」

妹は、

「そう。じゃあ、したらいいじゃない」といいました。にいさんは、木の上からおしつこをしました。木の下のどろぼうたちは、

「おや、雨がふってきたぞ」といいました。そして、またお金を数えつけました。

しばらくすると、また、にいさんがささやきました。

「ねえ、うんこがしたい。もうがまんできないよ」

「そう。じやあ、したらいじやない」

にいさんは、木の上からうんこをしました。どろぼうたちは、

「くそ。鳥のやつ、頭にふんをひっかけやがったぞ」といいました。そして、やつぱりお金を数えつけました。

木の上の子どもたちは、じつとしづかにしていました。しばらくすると、また、にいさんが妹にささやきました。

「このかきねの戸、重くてもう持つてられないよ」

「そう。じやあ、手をはなしたらいいじやない」

にいさんは手をはなしました。かきねの戸はどろぼうたちのまんなかに落ちました。

「うわあ。かみなりが落ちてきたあ」

どろぼうたちはそうさけぶと、大あわでにげていってしました。

朝になりました。にいさんと妹は木から下りて、かきねの戸をだいじにひろいあげました。そして、どろぼうたちがおいていったお金をぜんぶひろいあつめて、うちへ帰りました。

うちに帰ると、おかあさんが、ふたりをしかりました。

「おまえたちが、かきねの戸に気をつけなかつたから、どろぼうに入られてしまつたよ。うちの中のものがみんなぬすまれてしまつたんだよ」

けれども子どもたちは、森の中でどろぼうに出会つたこと、そして、どろぼうがほつたらかしていつたお金をぜんぶ持つてかえつてきたことを話しました。おかあさんは、大よろこびしました。

そして、そのお金で、テーブルやら着物やら食べものやらを買いました。それでもお金はまだたっぷりあつたので、おかあさんとふたりの子どもは、一生樂にくらすことができましたとさ。

